HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	今金･インマヌエル移住団体におけるキリスト教的開拓者精神
Author(s)	白井, 暢明
Citation	基督教学, 39, 1-25
Issue Date	2004-06-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46683
Type	journal article
File Information	39_1-25.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

論　文

今金・インマヌエル移住団体における
キリスト教的開拓者精神

白井暢明

序論　問題提起

「インマヌエル」（神ともにいます）、こう名づけられた土地に、明治二六年（一八九三）京都、埼玉からのキリスト教徒移住者たちによる異色の部落が創られた。現在の瀬棚郡今金町字神丘[1]である。明治期に北海道に入ったキリスト教的開拓移住団体としては、他に明治一四年（一九八一）の浦河・赤心社、明治二七年（一八九四）の浦臼・聖園農場、明治三一年（一八九八）の北見・北光社があるが、その中でもこのインマヌエル団体はひときわ異彩を放っている。それは、この団体のみが会社組織を取らず比較的自由な人々の集団であったことの他に、キリスト教徒のみによる理想郷建設を志し、しかも開拓移住の当初から、歴史的由来と性格を全く異にする二つの教派、即ち組合（会衆派）教会と日本聖公会の信徒たちが協働してここに部落を形成し、開拓に当ったことである。

本稿はこれまでの一連のキリスト教的北海道開拓者精神史研究[2]の一環である。北海道開拓者精神史においてキリスト教的団体に想定可能な特徴的要素としては、①郷里の地縁的結合からの離脱と新天地での理想郷建設の理想（移住

動機に関わる要素）、②厳しい環境に耐え得る精神的絆としての信仰ないしエートス（開拓実績と定着性に関わる要素）、③封建的なタテ社会とは対照的な民主的なコミュニティ形成（コミュニティ、自治の質に関わる要素）、④教会を媒介とした地域アイデンティティの形成（地域の連帯感やモラル醸成に関わる要素）、そして⑤日曜学校などを媒介とした青少年教育への貢献（地域の知的環境づくりに関わる要素）などである。そこでまず、これらの要素を指標としてインマヌエル団体の特性をどのように評価すべきか、また、この団体の独自性である理想の純粋性と二つの教派の協働・分裂がこの特性にいかなる影響を与えたのか、これらの問題について精神史的、宗教社会学的な観点から考察することが本稿の課題である。

ところで、インマヌエル団体に関する歴史的一次資料は、その組織が不安定なものであったためにきわめて乏しい。唯一の組織的存在である教会も、その基盤が司祭や牧師の常駐すら困難な小農村であったこと、また両教派の分離合同が繰り返されたこともあって、資料の散逸も著しい[3]。

第一章　移住開拓の経緯

一　移住の経緯と部落形成

諸資料から、インマヌエル団体の北海道移住と部落形成の概要は以下のようになる。明治二四年（一八九一）、京都同志社の学生で新島襄の薫陶を受けた組合教会員の志方之善[4]は、同郷の先輩田中賢道が犬養毅や尾崎行雄と共同して瀬棚郡利別原野に広大な土地を道庁から借り受け、開墾の計画を立てていることを聞き、学友の丸山伝太郎、大住（のち高林）庸吉と話し合って北海道に移住し、キリスト教的理想郷を建設しようと決心した。そこでその年の五月、まず志方と丸山伝太郎の弟要次郎（当時一七歳）が瀬棚に渡り、そこから丸木舟で利別川を上り、二日間かかって利別原野目名（中焼野とも言う、利別川と目名川の合流点近く）に到着した。とりあえず小屋を作り、生活の場を確保

した上で、秋になって志方は本格的な移住の準備のために上京し、丸山要次郎は一人で越冬することになった（現在その場所に「神丘発祥の地」と記された記念碑が建っている）。

翌明治二五年（一八九二）の春、志方は姉等を伴って目名に移住したが、秋には再び上京して丸山伝太郎と共に犬飼らと貸与を受けた土地の開墾委託の契約を結んだ。この年の一二月には高林庸吉と共に別ルート（国縫からのルート）からの探索を行い、志方はそのまま目名に残った。

一方、かねてから同志一二名と共に北海道への集団移住を計画し、その調査のために明治二五年（一八九二）三月から来道して移住候補地を探索していた天沼恒三郎という人物がいた。彼は埼玉県熊谷の聖公会信徒であった。彼は最初利別原野に目を付けたが、その殆どが犬飼等への貸下地であることを知って諦めた。次に太櫓に適地を見つけ、六月に貸下げの願書を道庁に提出したが、ここが御料林であるため貸下げは難しいとの答えを得た。彼は家族一同を一旦有珠郡西紋別（現在の伊達市）に移住させた上で、更に各方面への働きかけを続けていたが、翌明治二六年四月、すでに前年（時期は不明）に出会って会談し、そのキリスト教村建設の理想に共鳴していた志方之善を目名に訪ねた際に、翌日犬養毅が来道し、国縫で会う予定であることを聞き、同行した。犬飼に会った天沼は志方と共に、超教派的キリスト教村建設の理想を訴えたところ、犬飼は天沼とも開墾委託の契約をすることになった。彼は直ちにかねてから天沼の移住計画に賛同していた郷里の山崎六郎右エ門等同志にこのことを報告し、その年の六月、山崎一家と天沼恒三郎一家は目名に移住した（以上の経緯は通説とは異なっている）[5]。この天沼と山崎の二名が移住後の聖公会グループの中心人物になる。

組合教会グループでは、同年の五月には、丸山要次郎の家族（祖父辺、父正高）、志方之善の母、高林庸吉の家族ら九人がすでにこの地に入り、八月には川崎徳松一家や同志社の学生なども入地した。こうして一応の部落が形成された[6]ので、志方は一同に諮ってかねてから考えていた「インマヌエル」という地名を定め、更に次のような憲法を定めた。

一、基督教主義ヲ(ママ)賛成シテ移住スル者ハ、何人ヲ問ハズ、定域内ニ於イテ原野地一万五千坪ヲ託シ、成功ノ上十分ノ一ヲ教会費トナスコト。

一、住者ハ禁酒ハ勿論、凡テ風教ニ妨害トナルコトヲナスベカラズ。若シ犯セシモノハ契約ヲ解除スルコトアルベシ。

一、大祭日、毎日曜日ヲ休業シ、他愛主義ヲ採リ艱苦互ニ相助ケ、猥リニ貸借ヲ禁ズ。

一、移住者ハ自由自治ヲ重ンジ、各自独立ヲ図ルコト。(7)

これは明らかにこの村を完全に教派を超えたキリスト教徒の村にしようという思想の下に書かれている。こうしてインマヌエル村の基礎が定まり、毎日曜日の集まりは各自の小屋を順番に回って行われた。この年の九月に大洪水や秋の霜害があったため、単身の入殖者の大半が帰郷するというアクシデントはあったが、翌明治二七年（一八九四）には、組合教会の川崎徳三郎、笹倉福松等、聖公会の天沼喜蔵（恒三郎の弟）一家らが入地して一応キリスト教村としての体裁は整った。しかし他方、農業実践の経験に乏しい者を多く含むキリスト教徒のみの団体という制約もあって開墾そのものはあまり進展せず、このことが明治二八年（一八九五）の道庁への未開地返上と二年後の一般移住者への開放という事態、つまり〝キリスト教村〟という理想の挫折の原因となった。(8) この時点で開拓者としてのインマヌエル団体は事実上消滅し、その後は教会という組織を通じて生き続けることになる。

とはいえ後述するように、この部落の場合には、今日なおキリスト教徒開拓者の子孫たちが住民の中で占める比率の高さとも(9)関係して、キリスト教は教会という枠を遥かに超えた影響力をこの地域全体の精神風土に及ぼしている。

二　キリスト教信仰と教会の状況

当初、両派は共同して礼拝や集会を維持していた。しかし明治二八年（一八九五）頃から次第に礼拝形式などにおける両派の違い、互いの違和感が信者たちの間で意識されるようになったことがいくつかの資料に記述されている。(10)

函館の聖公会宣教師アンデレスがこの地を訪れ、会堂建設援助金三〇円を寄付したことをきっかけに同年の秋には聖公会グループの間に会堂建設の機運が高まり、翌年三月に教会堂が落成し（会衆一四名、子供四七名）、瀬棚から中村周二牧師も派遣されて日本聖公会利別講義所となった。一方、会堂も伝道師も持たない組合教会の方は、丸山要次郎宅に集まり、丸山伝太郎が礼拝や日曜学校を指導していたが、明治三一年（一八九八）春に、組合教会のローランド宣教師が宇田川竹熊牧師を伴ってこの地を訪問したのをきっかけとして、組合教会員を励まし、協力して笹小屋の教会堂を建て、「組合教会インマヌエル教会」と名づけた。その後宇田川牧師の指導のもとに明治三一年（一八九九）には現在の今金町市街に教会を移転した。

こうして両派は事実上分裂して二つの教会となった。その後太平洋戦争が始まるまでの間、聖公会は大正末期の四年間を除いては一応専任の司祭のもとで、また組合教会はほとんどの期間を無牧のまま、高林などの指導の下でなんとか教会組織と信仰を守り続けた。しかし昭和一六年（一九四一）の太平洋戦争開始とともに成立した宗教団体法により、両教会は否応無く日本基督教団に併合されることになった。つまり、両派は昭和一八年（一九四三）に合併して日本基督教団に加入、日本基督教団利別教会となった。

終戦後、不本意ながら日本基督教団に併合された教派の多くは教団から離れて元の教派に復帰していったが、今金の両教会は信徒数も少ない弱小農村教会という現状をふまえて、聖公会の山崎喜三郎（六郎右エ門の三男）、天沼義之進（喜蔵の次男）、組合教会の川崎徳松などの話し合いの結果、日本基督教団利別教会として改めて合同することになった。これは特に聖公会グループにとってはまさに親組織からの離脱を意味するものであっただけに苦渋の決断であった[11]。それだけに、このような全国的にも特異のケースが生まれた背景には、志方と天沼の会談以来の教派的異質性を超えた独特の連帯感が想定できるだろう。

しかしこの合同は長くは続かなかった。後述するような諸々の原因によって昭和二九年（一九五四）には聖公会が

教団から脱退して「聖公会インマヌエル教会」となり、再び分裂して現在に至っている。その経緯の詳細については第三章で述べることとしたい。

信者数に関しては、種々の記録から推定すると、明治三〇年（一八九七）の時点で総戸数約四〇～五〇戸のうち半数はキリスト教徒の家族、信者数は両派合わせて三〇名前後と思われる。利別村全体からすると、戸数でほぼ二〇％と推測される。[12] 現在まで残っているのは、組合教会の丸山家、川崎家、聖公会の天沼家、山崎家の子孫など少数の家系であるが、その家族、子孫を含めた信者数はかなりの数にのぼり、例えば昭和二五年（一九五〇）の時点で日本基督教団利別教会の教会員は一二七名、また昭和四〇年（一九六五）の時点（聖公会離脱後）では一五六名を数えている。[13]

第二章　移住の動機

今金インマヌエル移住団体の場合、他の同種団体とは異なって両派ともに会社組織での移住ではないこともあって、組織の設立趣意書や規約に相当する資料は乏しい。[14] 従って移住動機に関しては、創始者たちの言動を知る村の古老たちの回顧談や当時の社会状況などに関する限られた資料にも依存せざるを得ない。

移住の動機・目的として諸文献で挙げられているものとしては、政治的動機では、①北海道開拓によって国力の充実に貢献しようという愛国心、経済的動機としては、②藩閥専制政治の下での農民の窮乏からの脱出、及び③失職による生活上の窮乏からの広い土地への渇望、宗教的動機としては、④明治二十年代以降の国粋主義の台頭に伴うキリスト教弾圧の風潮[15]、そしてほぼ全ての文献が指摘するものとして⑤ピルグリム・ファーザーズの新大陸移住・開拓に倣った新天地北海道でのキリスト教的理想郷建設の理念、などがある。

ところで、インマヌエル団体の場合、明らかに異なる系譜を持った二つのグループが存在していることから、動機についても一応は別個に考えなければならない。第一の愛国心、国に対する忠誠心は、キリスト教的北海道移住団体

全てに共通する表向きの（特に国や道庁に開拓移住の許可を求める際の）動機として語られるものである。インマヌエル団体の場合にも、高林庸吉の回顧録にはそのような動機が次のように語られている。「国力を充実し、家を充実するには何処がよいか。北海道には不毛の原野がある。これが開拓に向かうことが目下の急務である。…この考えは何処から生まれたか。生きた手本、同志社の校長新島襄先生の感化であったことは申すまでもない。…先生の一言一行は凡て愛国の至誠であった。どんな人でも国家のため全身全霊を尽せというのが教育の方針であった」[16]。一方、聖公会に関しては、天沼家所蔵文書中の天沼恒三郎自筆の「北海道団結移住開墾志願ニ付其準備手続書」に次のような文言が見られる。「彼ノ荒漠タル原野ノ開拓墾成ニ心身ヲ託シ敢テ速力ニ事業ノ実功ヲ全シ大ニシテハ上　陛下ノ拓地殖民ノ聖意ヲ奉ジ吾日本帝国ノ生産ヲ増殖シ且ツ身ハ以テ北門ノ鎖鑰トナリ国家万一ノ凶変ニ応ゼントノ覚悟決心ニ候」。

しかし、他の同種団体の場合と同様、公に向けての愛国心吐露の表現はステレオタイプである上に、愛国心と北海道開拓移住との論理的結びつきは必ずしも明確ではない。それがどこまで本心なのか、また高林の場合には、それが同志である志方の愛国心と同質・同レベルのものであったかどうか、資料・文献だけから確定することはできない。

第二の農民の窮乏という点に関しては、『改訂今金町史』で、藩閥専制政治による農民の窮乏に対する志方之善の激しい糾弾の言葉と北海道移住の意思表明が丸山伝太郎との対話の形で、生々しく記述されている[17]。しかしこれは木俣敏著『悠久なる利別の流れ』の記述をそのまま引用したものであり[18]、しかも著者はその資料的根拠を明らかにしていない。著者がどのような資料を根拠にこのような具体的な記述をしたのかは不明であり、かなりの推測による記述（もしくは創作）が含まれていると思われる。

また聖公会グループに関しては、木俣前掲書では秩父困民党の蜂起が若き天沼ら農民にあたえたショックを想定している[19]。この点は確かに想定し得ることではあるが、しかしあくまでも推測にすぎない。ただ天沼、山崎らが埼玉の

農民出身であったこと、また、天沼家所蔵文書の「団結成業規約書」を見ると、彼らの場合にはこのような経済的理由が主たる動機であったことは間違いない。

第三の動機が一部にあったことについては、聖公会の山崎清太郎回顧談からも明白である。つまり、明治二五年（一八九二）頃、碓氷峠の隧道工事が完成、汽車の開通によって、鉄道馬車会社が解散することになり父の山崎六郎右エ門は失職した。そのとき、重役の大越米吉を介して天沼から北海道移住を勧められたのである。[20] 第四のキリスト教弾圧の風潮については、志方や天沼の周辺に特にそのような状況を示す証拠・資料がないことから、その妥当性は疑わしいと思われる。

最後のキリスト教的理想郷建設の理念については、ほぼ全ての文献が指摘していることであるが、[21] 様々な古老の回顧談や、志方によって書かれたと思われる唯一の文書「インマヌエル村憲法」からみても、この理念が志方、丸山、高林など同志社出身の組合派グループの主たる（ほぼ唯一の）動機であったと推測して間違いないであろう。一方聖公会グループに関しては、「団結成業規約書」の第一條に、「本団体は基督教信者ノ同志ヲ以テ組織シ聖父ノ愛護ニヨリ同心協力北海道ノ開拓事業ニ従事スル事」と書かれている。これだけでは必ずしもキリスト教的な理想郷建設の理念とは言えないが、しかし、他の資料[22]から見ても、彼等もまた最初からキリスト教徒のみの開拓部落の建設を意図しており、志方らの理念にも共鳴していたことは明らかである。

いずれにせよ、インマヌエル団体のこのような超教派的キリスト教的理想郷建設という動機はその純粋性という点において他の同種団体にも例を見ないものである。ただし、まさにこの純粋性とユートピア性こそが逆にこの団体の弱点につながっているとも言えるであろう。

第三章　信仰上の葛藤と教会分裂

一　初期の教会分裂

最初の両教派の分裂の原因については、まず宗教上の相違が考えられる。天沼義之進はその著書の中で「同じキリスト教徒とはいえ、伝統、教理、礼拝、組織を異にする両教会にあってはやむを得ない必然の結果であった」と書いている。[23] また山崎清太郎（六郎右エ門の二男）も回想録で「集会のもち方にも互いの先入観がある。プロテスタントとカトリックの特質的な違いも残っていたので、それが自分たちの会堂の必要さを強く感ずるようになったのでしょう」[24]と述べている。しかし、これらの言葉はあくまでも後からの分析であって、後述するように、その当時の信者たちの意識の次元では本質的なものであったとは思われない。また信者の中に聖公会と組合教会の歴史的な対立関係についての十分な認識があったかどうかも疑問である。

更に分裂の背景として、木俣前掲書あるいは山崎清太郎回想記では学生（同志社）対農民、独身者対家族持ち、関西出身者対関東出身者という身分・社会的構造の差異が指摘されているが[25]、少なくとも最初の二つの対立軸がこの分裂に一定の意味を持っていたことは確かであろう。

ところで、この分裂は両派の完全な断絶を意味しているわけではない。現在聖公会インマヌエル教会に保存されている初期の聖公会「礼拝日誌」を見ると、明治三一年（一八九八）から明治三三年（一九〇〇）までの本間弥門伝道師の時代、また次の今井四郎太伝道師の時代には、組合教会の宇田川牧師との連携のもとでかなり頻繁に両派の連合祈祷会が開かれ、実際にはかなり密な交流や協力関係があったことがわかる。例えば、明治三〇年（一八九七）から明治三四年（一九〇一）までは毎年、年頭の一週間は初週連合祈祷会を開催している。また明治三八年（一九〇五）にも連合祈祷会を実施した旨の記載があり、更にこの年の九月二三日、志方之善が四二歳で死亡した際には両教会の信者が集まって合葬している。[26] また、明治三三年（一九〇〇）九月一六日には、村の神社の祭典に際して聖公会と組

合教会が連合して路傍演説を行い、更に一〇月一四日には、「北金原の偶像祭典なるを機会に、組合と連合して其の境内において説教す。宇田川、今井、天沼恒三郎の三人、文書九二枚を配布する」と記録されている。地域の神社信仰との共存を図った浦河・赤心社の組合教会信徒、沢茂吉らとは異なって、今金の組合教会信徒が地域の神社祭祀を許容しない行動をとったこと自体注目に値するが、いずれにせよ、両派の親密な関係がうかがわれる事例である。

更に、後述するように、明治三一年（一八九八）頃に設立され、途中、中断の時期を経て大正三年（一九一四）に再興された利別基督教青年会には、少なくともその当初は聖公会会員のみならず組合教会員も加わっていた。これらの事実を見る限り、両派の外面的な対立の構図とは異なった内面的な求心力、つまり、志方と天沼の会談以来、この部落の両派信者たちの内面に脈々として受け継がれ、同じキリスト教徒としての一種の使命感にも似た連帯感の存続を見て取ることができる。

二　昭和の教会分裂

昭和二九年（一九五四）の両派の分裂の原因は、戦後の日本基督教団利別教会として合同した際に両派の間で合意された条件に関わるものであった。その条件とは、①牧会者は両教会派に、個人としても何等の関係なき者であること、②土地建物は、当面利別聖公会の会堂、牧師館を使用するが、③速やかに、今金にある組合教会所有地一反歩に新会堂を建てること、の三点であった[27]。

この決定に従って、昭和二五年（一九五〇）に名寄の日本基督教団手塩教会から相良愛光牧師を迎え、日本基督教団利別教会は相良牧師の熱心な活動によってしばらくは好ましい教会運営が続いていた。しかし、彼が今金への新教会建設・移転にあまり熱心ではなかったこと、おまけに今金の組合教会所有地とされていた土地が空手形であったことが発覚したことなどから、先の三つの条件のほとんどが反故にされたという不満が聖公会側から出てきた。更に、

当時使用していた教会と土地が日本聖公会の所有であったことから、昭和二九年（一九五四）、日本聖公会北海道教区より、現在使用中の土地建物を、日本基督教団による使用を中止するかまたは教団によって買収せられたし（しかも高額で）という通知が送られてきた。ここに至ってついに同年三月、聖公会会員は総会を開いて教団からの脱退と日本聖公会への復帰を決定した（聖公会員九〇名が脱退）。その際、教団側は日本基督教団利別教会の解体という印象を避け、聖公会の離脱という線で事後処理を行なおうとの意図から「利別教会」という名称に固執した結果、聖公会は新たに「聖公会インマヌエル教会」という名称になった。つまり最初の両教会の名称がクロス型に入れ替わったわけである。[28]

三　両派の反発力（対立性）と求心力（親和性）

これまでに述べた両派の関係を概観するとき、そこに反発力と求心力という二つの相反する力が常に作用しているように思われる。まず第一に、二度にわたる分裂の根本原因をどう理解すべきであろうか。両派の対立の理論的・歴史的要素としてまず考えられるのは伝統や教義上の相違である。

周知のように組合派教会と聖公会はその歴史的経緯からして本来は教派上の相違という次元を超えた対立関係にある。聖公会は事実上アングロ・カトリックであり、使徒伝承の主教を最高権威とし、サクラメント（聖餐・洗礼）を厳粛に守り、その執行を主教と司祭との神聖な権能のもとに委ねる。礼拝においては説教よりも儀式を重んじ、教会堂の建築や堂内装備、更に礼拝音楽など全て古来の伝統を重んずる。一方、組合教会は、まさに英国聖公会の弾圧を避けて新天地米国新英州プリマスに上陸したピルグリム・ファーザーズによって建設されたプリマス植民地の教会、そしてその中から生まれたアメリカン・ボードがその起源である。彼らは教会を「信徒の集まり」と理解し、キリスト以外のいかなる地上的権力・権威をも認めず、各個教会は信仰の独立・自治・自由の権利を持つと考えるのである。

更に、インマヌエルで実際に見られた両派の性格上の若干の相違は、他宗教に対する寛容性に関してである。先に述べた神社祭祀への抗議行動には両派が共同で参加したことになっているが、実際は一般的に偶像崇拝に対する拒絶反応が強い聖公会のイニシャティヴで、ごく一部の組合教会信者がそれに同調したという感が強い。また、昭和期にもこれと関連した小さなトラブルが生じている。[29]

さて、このような事情を考える時、両派の分裂は必然的なものと考えるのが自然かもしれない。しかし、インマヌエル団体の場合、両派信者たちの素朴な信仰や意識の中ではこのような教義的・歴史的な相違が決定的な影響を与えたとは思われない。最初の分裂の直接のきっかけになったものは、函館の聖公会宣教師アンデレスの訪問と三〇円の寄付金であり、二度目の分裂を決定づけたのは、日本聖公会北海道教区からの土地建物の使用中止の通告と、日本基督教団側の既得権の上に安住しようとする姿勢であったと考えられる。つまり、両派の分裂に対する決定的な要因となったものは信者たちの信仰や心情ではなく、財政的な問題と絡んだ教会の上部組織との関係、言い換えれば教会という組織の構造上の問題であった。[30]

ところで、このような成り行きは信者数や資金、牧師・司祭の確保など全ての面でハンディを抱える小農村教会の宿命であったかもしれない。しかし、それだけになお一層、一時的にせよこの両派がなぜ協働し得たのかという点にむしろ関心が集まる。その答えの一つは、北海道固有の風土に起因するものであろう。生き残るためには協働せざるを得ない未開で厳しい北海道の自然環境が志方と天沼との劇的な出会いと共鳴を演出した。更に、開拓の歴史から異種混合文化圏を作り上げてきた北海道の、異文化に寛容な精神風土もまた考慮に入れなければならないだろう。元来組合教会が超教派的な傾向を持っていたことは、同じ系統に立つ赤心社の浦河公会規約や浦河公会の指導者と大島正健ら札幌独立教会との親密な関係からも知られる。[31] この札幌独立教会に暗示されるように、北海道という独特の風土はキリスト者の一致（教会合同）という全てのキリスト者の心に潜在する究極の理想を実現する可能性を秘めた空間

であったと考えることもできよう。もし条件さえ整っていたら、このインマヌエルの地に超教派の完全に独立したキリスト者の集まりが生まれていたかもしれない。しかし、ここでその理想が成就されることはなかった。それを妨げたのは、この団体が拠って立つ地理的、社会的、経済的な制約であった。実際の一般信者たちの素朴な信仰の中には一貫してキリスト者としての連帯感が保持されており、また聖職者も分裂という事態に対する失望と負い目を感じていた[32]。

ところで、相良牧師が述べているように、このような両派の葛藤や分裂がこの地域の発展に対するなんらかの阻害要因になった[33]と考えることができるだろうか。「発展」という語を通常の経済的・政治的発展という意味にとるなら、このことは地域の発展とはほぼ無関係であろう。また精神・文化の面でもなんらかのマイナスの影響を与えたとは思えない。このような考えはあくまでも信仰の普遍性を信ずる真摯なキリスト者から見た負い目の表現であろう。

第四章　コミュニティ形成と地域発展への貢献

一　開墾・開拓の実績

ところで、信仰や教会のあり方を離れてインマヌエル団体を開拓実績や地域社会形成への影響力という観点から見た場合に他の同種団体との比較でどのような評価ができるであろうか。まず全く未開の原野であったこの土地に高い精神的な理想を掲げて入殖し、最初に原野を切り開き、現在の町の基礎を築いた功績は疑いようがない。しかし他方、少なくともキリスト教徒のみの理想郷建設という彼らの夢は、五年後の明治三〇年（一九八七）には早くも、この土地が一般移住者に開放されたことによって挫折した。その原因は移住開墾計画そのものが緻密なものではなくユートピア性を持っていたこと、そして特に組合教会派のリーダー（志方、丸山要次郎）が部落形成の時点ですでに新たな目標を持ち、開墾それ自体に対しては必ずしも積極的ではなかったこと[34]に求められる。また、初期の移住者（特に

組合教会員）の中に農業経験のない若い学生が含まれていたこともあって、全体として開墾の実績が挙がらなかったこともある。実際にこの地の開墾・開拓が進んだのは、一般移住者（そのほとんど農民）が入殖してきてから後のことであった[35]。

定着率の点でも、他の同種団体や非キリスト教徒の一般移住者、周辺地域の団体移住者たちに優っていたという証拠はない。むしろ、明治二六年（一八八三）から明治三〇年（一八八七）までの間にインマヌエル団体移住者（ほとんどがキリスト教徒）の約半数がいなくなったという記録がある[36]。特に当初移住してきた組合教会系の同志社学生たちのほとんどは数年以内に帰郷している。従って、苦難に耐える精神的絆を与えるものとしてのキリスト教信仰の機能という点で、この団体に対して高い評価を与えることはできないであろう。

ただし、この地に残った少数の信者たちは教会を中心として家族単位で定着し、家族を増やすとともに一般移住者たちが増えた時期にあっても地域発展の精神的、経済的核として活躍している例も少なくない[37]。

二　コミュニティ形成、地域アイデンティティおよびモラルの醸成

一方、コミュニティ形成や自治組織の面ではインマヌエル団体は他のキリスト教移住団体を凌ぐ影響力を示している。明治二六年（一八九三）に定められた部落の「憲法」の一項「移住者ハ自由自治ヲ重ンジ、各自独立ヲ図ルコト」に見られるように、この団体は本質的に自由自治を尊重する性格を持っており、これは例えば隣接する丹羽部落がきわめて官僚的な干渉主義であったことと際立った対照を示している[38]。

また、明治四五年（一九一二）四月一日付で発表された「慰満奴恵留部落住民申合規約[39]」では、組織のあり方、職務権限、住民の権利義務などが整然と定められ、組合長をはじめとする役員は選挙によって選ばれることなど、きわめて民主的な性格を示している。これも身分や地域的な因習から自由なキリスト教的移住団体の一般的特性の表れ

と言ってよいであろう。

確かに、この「申合規約」と先の「憲法」との間の距離は大きい。つまり、「キリスト教徒のみの部落」のルールから「異教徒、無信仰者を含めた一般の部落」のルールへの変化である。しかし他方で、この申合規約にもまた初期のキリスト教村の理想の影響が残っている。例えば、その第壱章、総則の第壱条には次のような文言が見られる、

一　住民ハ国権ヲ奉体シ徳義ヲ修メ知ヲ啓キ各自其職ヲ励精シ専ラ左記各項ヲ遵守シ以テ完全スル部落ノ進歩業達ヲ期ス。

二　各自其業ニ服スル忠実ヲ以テ肯トスル事

三　勤倹力行以テ産業ヲ治ムル事

四　信義醸厚ノ美風ヲ涵養スル事

五　去華就実ノ主義ヲ実行スル事

六　荒怠互戒メ以テ天職ヲ励行スル事

ここに見られる表現（傍線部）は必ずしもキリスト教のみに固有とは言えないまでも、少なくともピューリタン的倫理観との共通性が感じられる。それはこの規約に署名している住民一二一名中少なくとも一五名がキリスト教徒であったことと無関係ではないであろう。更に『改定今金町史』の統計資料[10]によれば、この年のインマヌエル部落への移住者は一〇〇名（戸主）となっている。その名簿と照合すると、この規約の署名者一二一名のうち、九五名がこの年の移住者ということになる。勿論これは、実際には明治三〇年から四五年の間に移住しながら、未だ届出がなかった者を多く含んだ数字であると思われる。しかしいずれにせよ、明治三〇年以降この年までにこの部落への移住者が急激に増加したため、部落の秩序と連帯感を強化する必要性を感じたそれ以前からの移住者（その中心はキ

リスト教徒）のイニシャティヴでこの規約が作られたと考えるのが自然であろう。その意味で、この部落住民のアイデンティティとモラル醸成の面でキリスト教信仰が果たした役割は大きいと言えよう。この点について『改定今金町史』では次のように記している、「当時地域が結束してこのような〝きまり〟を設定して開拓に入ったことは珍しいことであった。これはキリスト教会という絆によって結ばれていた特異な集落の成立に起因するものであろう」[41]と。

更に、明治二六年「憲法」や明治四五年「申合規約」の存在自体が、このような小規模の地域（部落）としては異色であり、これらが部落住民の間に現在にまでその影響力を残す強力なアイデンティティと独立の気風を生み出したものと理解することができる。その例を示すものの一つは後述する明治三一年（一九八八）の利別小学校学校建設に至る経緯であり、他の一つはこの地域の住民が六年余の歳月をかけて資料収集、編集の上平成三年に刊行した『黎明―神丘地区開基百年記念誌―』の存在である[42]。これはこの地域の住民の見識の高さと共に連帯感と独立心の強さを物語るものであろう。この書の編集後記の冒頭は「神丘地区の住民は非常に独立心が強い」という文で始まっている[43]。

三　青年会活動

インマヌエル団体と地域との関わりを考える際に無視できない存在は青年会組織である。諸資料によれば、明治三一年（一八九八）頃、キリスト教青年会（初代会長橋本常五郎）が存在し、同じ頃、インマヌエル青年会もできた[44]。しかし明治三七年（一九〇四）、聖公会鈴木善四郎伝道師が江差より転入するとともに、インマヌエル青年会は分裂、信者のみの青年会が成立した[45]。そして明治四〇年（一九〇七）頃、聖公会青木伝太郎牧師は両者の和合を図り「第一利別青年会」を創立、初代会長となった[46]。

更に、現聖公会インマヌエル教会に所蔵されている「基督教青年会」という文書[47]によれば、大正三年（一九一四）には利別基督教青年会が再興され、顧問には丸山伝太郎、会長には田中末吉が就任している。そしてこの利別基督教

青年会の「会則」の第二条では、この会の目的として、基督教の普及、地域モラルの醸成、自己研鑽、会員相互の親睦の四つを挙げ、毎月一回の例会を開くことを規定している。第三条では、会員資格として「満五才以上の基督教の信徒の青年もしくはキリスト教に有らざるも品行方正なる者」としている。実際の会員名簿を見る限り、当初の会員数四四名中の大半は聖公会信者であるが、顧問の丸山伝太郎をはじめ、若干の組合教会信者も含まれている。また、第四条では「本会員は飲酒喫煙盆踊りをなすことを厳禁す」と書かれている。実際の例会記録を見ると、例会の内容としては、説教、有志祈祷、講演、賛美歌練習が主で野外礼拝や共同耕作の記録もある。興味深いことは、例会の中で繰り返し禁酒禁煙や盆踊り、神社祭祀への参加禁止が取り上げられており、これは実態としてこのような規則を犯す者が多かったことを暗示するものであろう。

こうした青年会の経緯、内容を見る限り、青年会は基本的にはキリスト教徒のための内部的団体であり、地域住民に対して完全にオープンなものではなかったと言えよう。しかし、他の諸資料から知られる対外的な活動内容を見ると、例えば青年会で楽器を買い、制服を買って楽団を編成して近隣部落で慰問演奏をしたこと、幻燈会を開いたこと[48]など、地域の文化的活動の中心的役割を果たしたことがわかる。また地域のモラル醸成の面でも、会員は常に「気品を高く持て」と指導されていたと言われ、相良牧師も「青年会は年に数回教会堂に集まって集会をなし、牧師の奨励を受け真面目なる若人の団体として社会の人々より注目され利別一三ヶ村中にあってインマヌエル青年団は異彩を放ち人々の信用度も高かったと言う[49]」と記述している。

四　教育

移住当初から地域の子供や青年たちの教育に熱心であったことはキリスト教的開拓移住団体全てに共通の特徴である。インマヌエル部落には、明治三一年（一八九八）六月に利別村で最初の小学校である第一利別簡易小学校が設立

されたが、諸資料[50]から推測・確認されるその経緯は次のようなものである。入殖以来、児童教育とそのための学校の大切さは移住民の強い思いであった。明治二八年（一八八五）頃丸山要次郎が寺子屋式教育場を設け、高林庸吉が主となって夜に子供や若者に読み書きを教えていた。しかし寺子屋式の学校では本当の教育ができないという声が高まり、明治三一年（一八九八）三月にインマヌエル部落総代会で全会一致で学校設立を決議し、土地を選定した上で有志が関係方面に働きかけた結果、その年の六月に道から認可を受けた。部落民一同が進んで労力奉仕をして昼夜兼行で工事を進め完成した。最初の六ヶ月は天沼喜蔵が教員を勤め、その後を南部鑑太郎が引き継いだ。注目すべきことはその際の校舎建築費用一、〇五七円のうち、なんと七割以上にあたる七四〇円三七銭を部落有志の寄付でまかなったことである。開墾期の苦しい生活の中からのこうした努力は教育の重要性に対する〝信仰〟にも似た思い入れを想定しなければ理解不可能であろう。

また、組合教会の丸山要次郎や宇田川牧師による村の青年のための夜学校や日曜学校も盛んに行われた。すでに述べた基督教青年会もこの部落の教育・文化の向上に大いに寄与したと考えられる。更に昭和期を見ると、両教会が分離した昭和二五年（一九五〇）以降、組合教会は酪農学園（当時は酪農義塾、酪農短期大学）との協力の下に、積極的に農民福音学校を主宰し、また昭和三一年（一九五六）以降は瀬棚のガンビタイ地区伝道と三愛塾設立による酪農青年の教育に取り組んでいる。[51]

まとめ

以上の考察から、インマヌエル団体の特性として挙げられるのは次の点である。開拓実績、規模や定着性という点では他の同種団体に比してインマヌエル団体に特に高い評価を与えることはできない。また、動機としてのキリスト教徒のみによる理想郷建設の理念は他に例を見ないほど純粋なものであったこと、しかし一方それ故のそのユートピ

ア性、無計画性が指摘されるであろう。このような性格が開拓団体としての実績や定着率の停滞につながっている。この点は一部は同じ組合教会の系譜に属しながら、会社組織を作り、資金・運営の面でより一層綿密な計画をもって移住した浦河・赤心社の場合と対照的である。

他方、明治二六年の「憲法」、明治三一年の小学校建設、明治四五年の「慰満奴恵留部落住民申合規約」、そして平成三年の『黎明』の刊行等の背景には、通奏低音として流れ続ける一種の精神的エネルギーが感じられる。これはやはり志方・天沼の出会いと超教派的なキリスト教村建設の理想への共鳴に源を発するものであろう。その精神的エネルギーは他に類を見ない民主的で倫理的なコミュニティを作り、住民の地域アイデンティティやモラル醸成に大きな力を与えた。

ただし、このエネルギーには最初から反発力と求心力という二つのベクトルを異にする因子が内包されていた。反発力は、確かにその途上で様々な葛藤や分裂を生じさせたが、それは主として外的な要因、即ち地理的、社会的、経済的な制約に起因するものであった。従って、このような葛藤をあくまでも信仰内部の問題に閉じ込め、地域全体の連帯感の喪失を防ぐと同時に、むしろ独立心とアイデンティティを更に高めた内面的な求心力の方に注目すべきであろう。

いずれにせよ、インマヌエル団体が現在なお今金町神丘地区に残している存在感はきわめて大きい。我々が丘の上にある神丘墓地に足を踏み入れる時、そこに他を圧して立ち並ぶキリスト者の墓標群が、まさにこの存在感の大きさを象徴しているかのようである。

註

（1）現在の今金町に該当する地域はかつて利別原野と呼ばれていた地域のほぼ東半分に相当する。明治二六年に移住者がインマヌエルと名づけた地域はその一部であり、彼らが入殖した当時、利別原野全体がほとんど無人の地であった。明治三〇年にこの地域が利別村として瀬棚村から分村したが、その際インマヌエルは一五部落のうちの一つであった。昭和八年の地名改正令でインマヌエルは神丘と改称、更に昭和二二年に利別村は今金町となり、現在に至っている。

（2）拙稿「北光社・坂本直寛のキリスト教的開拓者精神―北海道開拓者精神史におけるその特色と限界―」（『旭川工業高等専門学校研究報文』第三七号、二〇〇〇）、同「北海道開拓者精神史における聖園農場および武市安哉の思想の特色と意義」（『研究報文』第三九号、二〇〇二）、同「浦河・赤心社におけるキリスト教的北海道開拓者精神」（『研究報文』第四〇号、二〇〇三）。

（3）現存する主な一次資料としては、現聖公会インマヌエル教会所蔵の「利別聖公会礼拝日誌」（明治二九～三八年、ただし三六～三七年の一部が欠落）、「基督教青年会会則・会員名簿・集会記録」、「組合教会日誌」（大正三年～昭和一七）などがあり、他に丸山家所蔵文書（明治二五～二六年当時の丸山要次郎の家族宛書簡や明治二六年の丸山一家等の「移住日誌」など貴重な資料を含む。痛みのため欠損部分が多いが、函館元町古文書研究会による優れた解読文が付けられ保存されている。）、天沼家所蔵文書（全て天沼恒三郎自筆による「団体成業規約書」、「北海道団結移住開墾志願ニ付其準備手続書」、「土地貸下願之件ニ付懇願書」、「生い立ちの記憶」など聖公会グループ移住の経緯を示す重要な文書を含む）などがある。

（4）当時二七歳。その前年に日本最初の女医として有名な荻野吟子（四〇歳）と結婚。吟子は明治二九年（一八九六）にインマヌエル部落に移住し、明治三一年（一八九八）には瀬棚で医院を開業。志方も瀬棚に転居し吟子を助けた。志方は明治三九年（一九〇五）九月、瀬棚で死去。

(5) 天沼らの移住の経緯については、明治二五年八月に志方と犬飼が国縫で会談した際に天沼も同席しており、その場で志方・天沼両氏への開墾委託契約がなされ、その後すぐに天沼は帰郷して同志に報告、移住の準備を進めたというのが通説となっている。『改訂今金町史上巻』(平三)、七九九頁、木俣敏著『悠久なる利別の流れ』(利別教会創立百周年実行委員会、昭五九)一〇一頁以下、天沼義之進『今金インマヌエル教会沿革史』(昭和四三)二頁参照。しかしこの通説が明らかな誤りであることが判明したのは、つい最近筆者が天沼家所蔵文書の中の、天沼恒三郎自筆による「北海道移住開墾事業企望ニ付(以下欠損)」(明治二五年一二月一五日付、埼玉県大里外三郡長中村孫兵衛宛)、「土地貸下願之件ニ付懇願書」(明治二六年二月、北海道庁長官北垣国道宛)、「北海道庁技手高橋宛文書」(明治四四年三月)、「吾が生立の記憶」(成立時期不明、ノートブックにペンで書かれたもの)を解読して以来である。紙面上の都合でここでは詳細を省くが、これらの文書には本文で概説したような経緯が年月付きで詳細に記録されている。

(6) 『改訂今金町史上巻』二五六頁の統計資料によれば、この時点で今金町(明治三〇年にできた旧利別村に該当する地域)全体の世帯数は三八戸、その内インマヌエル部落は二三戸となっており、事実上インマヌエル団体が現今金町の基礎を築いた先人と言えよう。

(7) 『新撰北海道史』(北海道廳、昭一二)第四巻通説三、三八七頁。

(8) 希望を失い、土地を新移入者に売り払って今金など他地区へ移った者も多かったという。相良愛光『日本基督教団利別教会の由緒と沿革』(日本基督教団利別教会、昭四〇)八六頁。

(9) 『黎明—神丘地区開基百年記念誌—』(神丘地区開基百年協賛会、平三)のVI「各戸百年の歩み」(一八五頁以下)から集計すると、平成三年当時神丘地区に住む世帯一二二戸の内、キリスト教徒の世帯は二〇戸(聖公会と組合教会が半々)、真宗本願寺派、大谷派、曹洞宗など仏教系世帯が九〇戸、その他(神道系、無宗教)が一二戸となっており、キリスト教徒世帯の比率は一六・四%である。この数字は他の地域の状況から見て異例の高さを示すものと言えよう。

(10)『今金町開基七〇周年記念　開拓回想録』（今金町開拓団回想録編集委員会、昭四二）九九頁、天沼義之進前掲書四頁。

(11) 同一三頁では、この辺の事情を次のように記している、「開拓の父祖の信仰を受け継ぐべきは十分承知しながらも牧師の居らぬ弱小農村教会は、経済的自給の見通しは立たなかった。」。

(12) 相良前掲書五～六頁、二五～二六頁、天沼義之進前掲書七頁、『改定今金町史上巻』二五六頁以下。

(13) 相良前掲書二五～二六頁、六三～六四頁。

(14) 浦河・赤心社の場合は「赤心社設立之趣意」、浦臼・聖園農場では「高知殖民会規則」、北見・北光社では「北光社移住民規則」が作成された。それらについては前注(1)に挙げた拙稿参照。一方、聖公会グループの場合には、前述の天沼家所蔵文書の中の「団体成業規約書」、「北海道団結移住開墾志願ニ付其準備手続書」がそれに該当するであろう。

(15)『新撰北海道史』第四巻—通説三、三八五頁以下、奈良原春作『荻野吟子』（図書刊行会、昭五九）一三五頁。

(16) 高林庸吉回顧録（『黎明』二五五～二五九頁）。

(17)『改訂今金町史上巻』七九七頁には次のように記述されている、「二年後輩の丸山伝太郎に〝つらつら世の中を観るに憲法発布、衆議院議員の選挙とお祭り騒ぎの浮かれ様であるが百姓の暮しには現在にも将来にも何の希望もない。世の中とは無関係に国や地主から責め立てられ、庶民の窮乏は遂には米騒動に発展する始末である。天下の衆庶まさに飢えなんとすだ、おれは北海道にいく。忠臣面をした薩長族の塵を払うことなぞおれの性にはに合わぬ、北海道の荒野を切り拓いて百姓をする。力になってくれ〟と…」。

(18) 木俣前掲書一三頁以下。

(19) 同九一頁以下。

(20)『今金町開基七〇周年記念　開拓回想録』八八頁。

(21) 若林・加納『北海道開拓秘録（三）』（時事印刷株式会社、昭和三九）四六頁以下（若林が昭和一〇年八月一〇日に当時区長

の高林庸吉を尋ねて直接聞いた話)、高林庸吉回顧録(『黎明』二五五~二五七頁)、『今金町開基七〇周年記念　開拓回想録』八五頁以下、『昭和三三年版今金町史』一一五頁。

(22) 天沼家所蔵文書の中で天沼恒三郎は度々「基督教(ないし宗教)村建設」という表現を用いている。また、天沼家で作成した小冊子『あゆみ』(一九九三)によれば(恐らく恒三郎の弟喜蔵の長男、義之進の証言によるもの)、最初に喜蔵がキリスト教徒になり、その勧めで兄や家族が入信した。喜蔵は『福音新報』に掲載された田村顕允(伊達亘理藩の家老で、明治二年、藩主伊達邦成と共に有珠郡に集団移住し、現在の伊達市の基礎を築いた。明治一九年頃押川方義を伊達に呼び、邦成らと共にキリスト教に入信した)の「北海道移住について」の一文(未確認)に感銘を受けて北海道への開拓移住、キリスト教村建設の理想を抱き、兄恒三郎や家族に話したところ、同意を得たものだと言う。ただし「吾が生立の記憶」における恒三郎の叙述から見ると、彼自身の移住動機の主たるものは経済的なものであることがわかる。

(23) 天沼義之進前掲書八頁。

(24) 『今金町開基七〇周年記念　開拓回想録』九九頁。

(25) 木俣前掲書、一四〇頁、一七七頁、『今金町開基七〇周年記念　開拓回想録』九八頁。

(26) 「利別聖公会礼拝日誌」明治三八年九月二四日の記録。

(27) 天沼義之進前掲書一三頁。

(28) 同一五~一六頁。

(29) 昭和三二年一一月一七日、神丘共同墓地で無縁者慰霊碑建立式が行われた。これは聖公会の山崎喜三郎の個人的発案で、開拓途上で亡くなり、無縁となっている人々をキリスト教会と仏教寺院の共同で墓碑を建てて慰霊しようというものであった。しかしこの発案には聖公会側から宗教的異議が出された。建立式当日、健康上の理由(恐らくは口実)から司式を断ったインマヌエル教会の小貫主任司祭に代わって、利別教会の相良牧師が司式を担当した(相良前掲書七〇頁以下)。ここにも教

会の純粋性を重んずる聖公会と基本的に他宗教に対して寛容な組合教会との相違が現れている。なお、現在キリスト者の墓が立ち並ぶ神丘墓地の中で、この墓標には慰霊碑文字の上に十字と卍の記号が並び刻まれ、特異な印象を与えている。

(30) その意味では、海外からミッションのため日本に派遣された諸教派の宣教師の存在が日本のキリスト教界における合同への機運にむしろマイナスの影響を与えていると言えるであろう。

(31) 拙稿「浦河・赤心社におけるキリスト教的北海道開拓者精神」(『研究報文』第四〇号、二〇〇三)八二頁および注67参照。

(32) 相良前掲書五頁。

(33) 同四頁。

(34) 丸山家所蔵文書中の丸山要次郎の父正高宛書簡から推測されることは、要次郎は明治一六年春の丸山一家等集団移住の段階で、創業者としての自分の役割はすでに終わったと考え、国際的規模で活躍する商人(ビジネスマン)になるという人生設計を描いていたこと、また志方は自分の土地の開墾を丸山正高(要次郎の父)に任せ、新たな使命感(恐らくは伝道活動)に燃えていたことである。

(35) 同八六頁、八八頁。

(36) 『改定今金町史上巻』二一九頁、『昭和三三年版今金町史』一一九頁。

(37) 例えば、地域の発展に大きく貢献した初期の信者としては、農業の分野では、高林庸吉(森林組合設立)、笹倉福松(貯金組合設立)、橋本常五郎(同)、川崎徳松(産業組合長)、天沼喜蔵(最初の水稲の試作)など、自治の領域では丸山正高(利別村初代総裁)、天沼恒三郎(村会議員)、天沼喜蔵(同)、笹倉福松(同)、郵便事業では高林庸吉(郵便局長)など、教育の分野については後述。

(38) 『昭和三三年版今金町史』一一九頁。明治二四年(一八九一)から旧会津藩士で元警察官の丹羽五郎によって企画され、推進・運営された丹羽部落(現北檜山町丹羽)開拓移住団体は顕著な開拓の成果を挙げたが、その徹底した官僚主義的統率・

管理の様子については『北桧山町史』（昭五六）二七一頁以下参照。

(39)『改定今金町史上巻』一三三頁以下。原資料は丸山家所蔵文書の中にある。

(40) 同二六八頁以下。

(41) 同二三三頁。

(42) すでに本稿で何度も引用されているこの大著（B五版三一四頁）は、この地域の開拓の歴史から始まって、現在（刊行時）に至るまでの産業、教育・文化、生活の推移について概説し、更に「各戸百年の歩み」の章では、現住するほぼ全ての世帯（一二二戸）について、各戸の由来、系図、現況（家族構成）などを詳述している。

(43)『黎明』巻末。

(44)『改定今金町史上巻』一三三頁、七五一～七五二頁。

(45) 相良前掲書一四頁。

(46)『改定今金町史上巻』七五一～七五二頁。

(47) 表紙には「基督教青年会会則・会員名簿・集会記録」となっており、会則は大正六年一月改正となっている。集会記録は大正三年一月～昭和六年一月までの記載がある。

(48)『今金町開基七〇周年記念　開拓回想録』一〇一頁以下、一一一頁。

(49) 相良前掲書一四頁。

(50)『改定今金町史上巻』六八五頁以下、八七七頁、『今金町開基七〇周年記念　開拓回想録』一〇六頁以下、『黎明』六五頁、二五七頁。

(51) 相良前掲書四三頁以下、「利別教会日誌よりの記録」参照。